

児童精神医学者アンリ・ワロンの実像

山本 政人

アンリ・ワロン（1879～1962）はフランスの児童精神医学者である。第2次大戦中、レジスタンスに参加し、大戦後はフランスの国会議員を務めるといった数奇な経歴を持つが、日本では発達理論家として知られている。これは波多野、滝沢、浜田らがワロンの著作を翻訳し、ワロンを発達理論家として紹介したからである。

日本の児童心理学において、ジャン・ピアジェの研究は一世を風靡したが、ワロンはあまり知られておらず、一部の研究者が注目しているに止まる。それも多くはピアジェとの対比においてであり、ピアジェの研究が古典となった今日、ワロンは忘れられた人といっても過言ではない。

そのワロンを取り上げるのは、これまでの日本の心理学者によるワロン理解が、いささか以上に偏っていると考えるからである。波多野をはじめとする日本の心理学者たちは、ワロンをピアジェと並ぶ発達理論家として紹介したが、ワロンとピアジェの立場は明らかに異なり、発達へのアプローチ方法も異なる。ピアジェの立場を児童心理学とすれば、ワロンのそれは児童精神医学であり、その違いを理解することなしにワロンを理解することはできないと考える。小論はワロンが児童精神医学者であることを再確認し、児童精神医学者としてのワロンに学ぼうとするものである。

1. 『知能の誕生』の衝撃

ピアジェとワロンの違いについて、滝沢（1975）は次のように述べている。

ピアジェは、いわば論理学者として、子どもの発達を研究していこうとしたのに対して、ワロンは、むしろ、言葉の厳密な意味での臨床家であった。（中略）とくに、ワロンは、子どもの精神発達の中でもっともするどくあらわれるこの矛盾のはたらきを分析し、何が進歩の条件で、何が障害の条件であるかを、明らかにしようとしたのに反し、ピアジェは、各発達段階を経て獲得される論理の統一的法則をとり出そうと努めている点で、ワロンとピアジェの方法論の間に、いちじるしい対照的な姿をあらわしている。

滝沢はピアジェを「論理学者」、ワロンを「臨床家」としているが、一般的には児童心理学者と児童精神医学者というべきであろう。ただ、ピアジェは児童心理学者の範疇に収まらない。彼はもともと生物学の研究から出発し、哲学、精神分析学、心理学、言語学、数学等へ関心を広げた。実証研究は心理学分野のものであるが、他の分野への造詣も深く、博覧強記の学者であった。滝沢が彼を「論理学者」としたのは、そのような彼の経歴を踏まえてのことかと思われる。一方、ワロンはまず医師であり、軍医として第1次大戦に従軍している。そして彼の研究は本来児童精神医学分野のものである。当然、発達を扱っているが、彼の観点、方法論は、児童心理学に通じるものではあるものの、心理学とは異なるものである。

ワロンは1932年に『児童における性格の起源』（Les origines du caractère chez l'enfant）を出版する。これはワロンの初期の論文集で、彼の代表的論文である情動に関する論考を含み、そこから彼の基本的な考

えを読み取ることができる。一方、ピアジェは1936年に『子どもにおける知能の誕生』（La naissance de l'intelligence chez l'enfant. 以下『知能の誕生』）を出版する。そこでは乳児の行動が詳細に描写され、認知発達に関するピアジェの見解が縦横無尽に展開されており、特に言語発達に関する彼の見解はユニークなものである。感覚運動的活動の進展に伴い、象徴機能が発達する。そして感覚運動期の終わりに表象が発生するに及んで、乳児は記号（言語）を獲得するというのがピアジェの見解である。言語、正確に言えば記号は、個体発達の中で獲得される。そこには情動も集団も出てこない。

ピアジェのこのような見解は、ワロンにとっては驚愕すべきものであったに違いない。ピアジェはあくまで個体発達の中で言語獲得をとらえた。しかしワロンにとって言語は、人類の進化の過程で出てきたものであり、集団の中で獲得されるものである。ワロンは『行動から思考へ』（De l'acte à la pensée. 1942）においてピアジェの『知能の誕生』を詳しく紹介しているが、ワロンの基本的観点は進化と集団の観点である。ピアジェは個別の乳児の観察から、ワロンは進化論や人類学の研究から、表象と言語の獲得過程を考えた。両者の観点の違いは歴然としており、ピアジェがあくまで個体発達を扱っているのに対し、ワロンは進化の延長線上に個体発達をとらえている。ワロンはピアジェの研究が優れたものであることを認めたが、成熟や集団の観点が欠けていることを批判した。

『児童における性格の起源』と『知能の誕生』を比較すると、後者が完成度の高い研究書であるのに対し、前者は論文集であり、しかもタイトルと内容が一致していない。そして後者は乳児の膨大な観察記録に基づいている。ワロンは大いに刺激されたに違いない。『知能の誕生』によって個体発達の視点に目覚めたと同時に、ある種の危機感を覚えたのではないかと思われる。

滝沢（1975）は、ワロンが第1次世界大戦に軍医として従軍したことで発達の視点に目覚めたとしているが、これは認め難い。『児童における性

格の起源』が発達論ではないこと、そして『知能の誕生』の後に『子どもの精神的発達』（*L' évolution psychologique de l'enfant*. 1941）と『行動から思考へ』（1942）を続けて出版していることから、ワロンが発達論に本格的に取り組んだのはピアジェの『知能の誕生』以後のことであると思われる。

個人心理学の領域で、これに新しい傾向を注入しながら、若がえらせるために、理論的にもっともすすんだ試みをした心理学の一つに、ジャン・ピアジェの心理学がある。（『行動から思考へ』邦題『認識過程の心理学』滝沢訳，1962）

ワロンはピアジェをこのように評価し、『知能の誕生』の内容を紹介した上で、次のように総括する。

ピアジェによって提出された説明体系は、鋭い叙述と、きわめて巧妙なアプローチによってささえられているだけに、教えられるところの多い実例である。にもかかわらず、その短所は、すべての心理学についてもいえる短所なのだ。すなわち、その領域は、個人を限界とし、個人のなかに、意識の非個性的な発現をみるのである。（前掲書）

ワロンはピアジェを個人主義と決めつけ、続けて成熟と集団的思考を持ち出し、ピアジェがその両方を無視しているとする。成熟を無視しているという指摘は児童精神医学の立場からのものであるが、集団的思考とはどのようなものなのか。少なくとも現代の社会心理学で扱っているものとは異なる。当時の人類学の知見、あるいはデュルケムの「集団表象」に由来する概念であろうか。

ピアジェによれば、子どもの知的な社会化は、子どもの思考を客観的に

する。はんたいに、レヴィ・ブリュールとブロンデルによれば、原始人の前論理的思考と、実験的思考とを分けるのは、集団的、社会的表象の影響によるのだ。（中略）ブロンデルでは、問題ははるかにけわしい。というのは、レヴィ・ブリュールとははんたいに、客観的認識の起原となるものと、客観的認識の正反対のものとを、区別することにつとめているからだ。おそらく彼は、矛盾のするどい点を、十分に感じとっていた。彼は、客観的認識が、人間が社会からうけとったすばらしい贈り物だという理由で、記述したのではないだろうか。（前掲書）

ブロンデルがどのように考えていたのかはわからないが、ワロンは客観的認識を社会から与えられたものと考えていた。これはピアジェ、そして児童心理学の考え方とは明らかに異なる。ワロンは「原始人」の思考様式と子どもの思考様式は類似しているものの、その本質は異なり、子どもは思考そのものが未成熟であるのに対し、「原始人」の場合には、思考に必要な道具、制度、観念体系等が未発達なのであるとする。このことから客観的認識や科学的思考は社会から与えられるという結論に至るのであろう。

正確な意味での「原始人」の思考様式など知るべくもないが、ワロンはレヴィ・ブリュールら人類学者が明らかにした未開民族の思考様式を「原始人」のそれと同一視し、『行動から思考へ』の中でかなり詳しく説明している。しかし、「原始人」の思考様式が本当にそのようなものであったという証拠はないし、社会の発展によって思考が発達したという証拠もない。そもそも「原始人」というのはいつの時代の人類なのかはっきりしない。仮に有史以前の人類であるとして、それと未開民族を同一視してよいものであろうか。

このようにワロンのピアジェ批判の一方の論拠は薄弱なものである。ただ、この批判は児童精神医学からのものではなく、当時的人类学あるいは進化論の観点からのものである。その反面、児童精神医学の観点からの批判、すなわち成熟を無視しているという批判は生物学的な知見に基づいて

おり、これについては多くを語る必要もない。たとえば、ピアジェが「シエマの協応」として重視した生後4か月頃に成立する目と手の協応動作は神経のミエリン化（髄鞘化）という成熟で説明できる。目と手の機能の行使という経験も必要であるが、その前にミエリン化がなければ協応は成立しない。

ピアジェは、ワロンがいうように成熟を無視したわけではないが、『知能の誕生』では次のように述べている。

もし、視覚と把握との協応が単に神経系の生理学的成熟の問題であるとすれば、ジャクリーヌ、ルシアンヌ、ローランという正常な三人の子どもをあいで獲得期のずれが、なぜこれほどまでに大きいのかを理解することはできない。（『知能の誕生』谷村・浜田訳、1978）

ピアジェが重視したのは発達をもたらす機能である。彼はそれを「同化」と「調節」と呼び、目と手の協応をもたらすのは主に感覚運動的同化であると考えた。これに対し、ワロンは神経系の成熟を重視し、『児童における性格の起源』の中では機能の中枢がどこにあるかということを重視した。これは反映論であり、還元主義のように見えるが、ワロンは『行動から思考へ』の中では還元主義を否定している。

かつて、心理学が、解剖学を濫用したことがある。だが、これが、有機的なものと心理的なものとの関係をすべて否定するための理由にはならない。そのうえ、なによりも、この濫用は、解剖学的要素やその役割をそのままひきうつして、心理的要素やその相互関係から心理学的分析が解明されるようにおもわれていた点である。そしてつぎには、心理学的要素が、解剖学的要素に還元されうるという錯覚をあたえていた点にある。（『行動から思考へ』邦題『認識過程の心理学』滝沢訳、1962）

「有機的」は「器質的」と訳すべきである。「心理学」が具体的にどのような研究を指しているのかはわからないが、ここでは心理的なものを器質的なもの、すなわち脳に還元することはできないという見解を表明している。しかし、ワロンは『児童における性格の起源』において機能の中枢の位置を強調している。それが還元主義的であることは否定できない。解剖学を濫用したというのは、実はワロン自身である。そしてワロンが還元主義から脱却しようとしたのは、『知能の誕生』第1章冒頭の次のコメントに衝撃を受けたからではないかと思われる。

ワロンは『問題児 (L'enfant turbulent)』というすばらしい著書のなかで、「感覚運動的段階つまり皮質的段階のまえに、情動的段階つまり姿勢反射や錐体外路系反応の段階があるのではないか」という問題をとりあげているが、これはこれらの生理心理学的問題のなかでも特に重要なもののひとつである。発生的分析のなかにたえず豊かな病理学上の症例を援用しているワロンのこの議論ほど、初期の行動の複雑さをよく示し、同時に併存する生理学的系のあいだに継起的段階を画すことの必要を、よく示してくれるものはほかにないだろう。しかし、このようにして得られた結果がどれほど魅力的であっても、乳児の初期の行動と将来の知的行動との連続性を捉える段になると、今日おおまかな記述の域を越えることは難しい。それゆえ、心的メカニズムと生命そのもののメカニズムとを同一視しようとのワロンの努力には同情しつつも、われわれは、外的行動のみからみていくという視点を離れることなく、ただ両者の機能的同一性を強調するだけに甘んじなければならないと考える。（『知能の誕生』谷村・浜田訳、1978）

方法論として行動主義を表明し、ワロンを挑発するようなコメントである。ピアジェとワロンの方法論の違いは、心理学と精神医学の方法論の違いともいえる。これに加えて、ワロンはピアジェが『知能の誕生』で

展開した「表象の発生」に関する見解にも衝撃を受けたのではないかと思われる。彼は『行動から思考へ』の中でピアジェとは異なる見解を示そうとした。

人類にとっては、物理的環境、感覚運動的反応の環境、じっさいの目標物の環境などと重なって、もう一つ、単に表象だけにもとづいた環境が存在している。ここで、表象の道具がつかわれる。（『行動から思考へ』邦題『認識過程の心理学』滝沢訳、1962）

「表象だけにもとづいた環境」とは「心的現実」であろうか。ワロンはそのような内的世界の発生が、表象とは異質な感覚運動的活動の発達の結果であるとは考えなかった。両者の間には越えられない壁があると考えた。

しかし『児童における性格の起源』において、ワロンは情動を自動作用（自律神経に支配された活動）と表象を橋渡しするものと位置づけていた。脳を起源とする情動が、同じく脳に支配されている自動作用と、表象や知的活動とをつなぐと考えていたのである。しかし『行動から思考へ』では、情動を前面に出さず、代わりに集団の中での模倣や儀式的役割を強調し、表象の起源が脳にあることを示唆する記述がなくなっている。これは大きな転換であり、二元論への転向といっても過言ではない。

デカルト的平行論のほうが、はるかに、簡易主義でもなく、あやまってもいなかったのだ。思考の法則と、延長ないし物質の法則とは、同一のものだと仮定されてきた。だが、この二つの現実は、やはり異なっているのだから、一方を他方へと、無条件的に、還元されなかった。思考のはたらしきは、単なる反映だとみなされなかったのだ。（前掲書）

この記述は明らかに先の『知能の誕生』のピアジェのコメントに対応するものである。ピアジェは、ワロンが心的メカニズムと生物学的メカニズ

ムを同一視しているとした。これはそれに対するワロンの反論である。「簡易主義」とは還元主義のことか、でなければ、ピアジェが身体の成熟を無視し、外的行動のみから発達をとらえようとしたことを指している。デカルト的二元論の方がはるかにましというのである。そして還元主義を否定し、心という現実（心的現実）と物という現実は同一視できないとしている。ワロンの立場は二元論ということになる。

さらにワロンは徹底的にピアジェを批判した。面白いことに、「臨床家」であったワロンは、臨床事例ではなく、進化論や人類学という自分の専門とは異なる分野の知見に依拠してピアジェ批判を展開した。滝沢（1975）や加藤（1996）は、この両者の応酬についてはワロンの方に軍配を挙げているが、これはワロンの執拗なまでのピアジェ批判に引きずられたきらいがある。『行動から思考へ』は何よりもピアジェへの反論と批判の書であり、ワロン自身の立場ははっきり表明されていない。それを無理に読み取ろうとすれば、ワロンの実像から離れていくように思われる。次のコメントなどはその典型例である。

デカルト（Descartes, R.）以後、思惟（pensée）の次元と延長（étendue）の次元とを仮定することによって、両者の相互作用が取り除かれてしまい、ラ・メトリー（La Mettrie, J.Q.）のような物理的機械論の立場を除き、存在は思考に解消されることになって、事物との接触も行為するということも、感覚や観念に解消されることになったのだが、ワロンは、このようなデカルト的二元論の克服を心理学に求める。（加藤、1996）

加藤は観念論を二元論と混同しており、「デカルト的二元論の克服」は「観念論の克服」とすべきであろうが、いずれにせよ、ワロンがデカルト的二元論の克服を心理学に求めたというのは大いに疑問である。ワロンはマルクス主義的弁証法が心理学に対して果たした役割として、「要素的唯物論か空虚な観念論か」あるいは「粗野な実体論か無制限の非合理論か」

という二者択一を排除したことを挙げている（Psychologie et matérialism dialectique. 1954, 「心理学の立場」滝沢訳, 1960）。ワロンは二者択一ではなく、物と心という2つの現実を認め、それらが同じではないと考えた。

『行動から思考へ』においてワロンは二元論に限りなく近い立場であったように見える。脳という実体とは別に心という実体を想定する限り、二元論を克服することは不可能である。二元論に陥らない方法の1つは、心を脳で説明する還元主義ないし機械論であるが、『行動から思考へ』においてワロンはこれを採らなかった。もう1つは、ピアジェのように脳を無視することであるが、ワロンはこれも採らなかった。

『児童における性格の起源』の情動論にこそ、後に二元論を克服する可能性が存在していた。それはワロンの時代には還元主義とされたものであるが、今日では科学的な見方であり、ワロンはそれを先取りしていたと見ることができる。ワロンの原点であり、先駆的研究ともいえる『児童における性格の起源』を見直す必要がある。

2. 情動の役割

アンリ・ワロンの『児童における性格の起源』は不思議な本である。序説こそ「性格の問題」となっているが、本論において性格は扱われておらず、第1部が情動、第2部が身体意識、第3部が自我意識をテーマとしており、性格に関する記述はほとんど見られない。情動、身体意識、自我意識が性格の起源であると考えerこともできなくはないが、そのような説明も見当たらない。

実は、この本は3つの独立した論文の再録であることがまえがきに記されている。それを1冊の本にすることの理由として、第1部のもとの論文を載せていた講義集録が品切れになったこと、3つのものを1つにすることで新しい統一体ができることを挙げているが、「性格の起源」というタ

イトルをつけた理由は述べられていない。

序説においてワロンは、性格とは個人が日常生活の様々な場面で繰り返している反応様式であるとし、次のように述べている。

反応様式の説明は、個人のいろいろの傾向とこれこれの状況とが不可分に形づくる総合体に立脚する。両者を統一している適応活動こそが第一の事実であり、他は分析したものにすぎない。しかし生物学には、本質的な統一をやぶらない分析の手続きがある。それは生体と機能の発生的研究である。ここではさらに特殊な場合として、幼児がその発達途上で、段階をおって、性格と呼ばれるごとき個人的特徴をどのようにつくりあげて行くかを見るのである。（『児童における性格の起源』久保田訳，1965）

発生的研究の優位性を説き、「性格と呼ばれるごとき個人的特徴」の形成を発達的に見るとしている。それが情動、身体意識、自我意識の段階と考えることができるが、それらに関する論考において、性格の問題は出てこないのである。

「性格と呼ばれるごとき」という表現は訳者の創作であるが、ワロンの意図を汲んだ表現となっているようである。序説においてワロンは、性格類型が恣意的に作られた枠組みであるとし、クレッチマーの説を例に挙げて、心理学の性格研究が相関関係を示したに過ぎないと性格研究そのものを批判している。想像を逞しくすれば、ワロンは「性格」に関する本の執筆を依頼されたが、それが書けなかった、あるいは書きたくなかったため、タイトルには「性格」を入れたものの、性格とは無関係の3つの論文を再録したのではないか。

『児童における性格の起源』が出版されたのは1932年。性格に関してはクレッチマーが新たに体型説を唱えたが、序説からうかがえるように、古代からの体液説がまだ支配的であった時代である。それについて論じることとはワロンの本意ではなかったに違いない。

この本の核はやはり第1部「情動的行動」、後にワロンの情動論として知られる情動に関する論考である。その冒頭で彼は次のように述べている。

個人の性格の本質的な因子の一部に、その個人が反応し適応すべき外的状況も加わっているのだとすると、ごく幼い子どもにおいては、まだ性格ということ自体が問題になりそうにない。（中略）また性格が、反応の仕方の中の一定の傾向を言うものだとすると、やはりそれは幼児ではなかなか見られないものである。（前掲書）

「幼児」は「乳児」と訳すべきであるが、その時期にはまだ性格は見られないといい切る。その上でワロンは、乳児において様々な機能が発達してくることを強調する。まず視覚を取り上げ、生後しばらくの間、目の動きとまぶたの動きが不協応であるため、視覚は役に立たないとする。次に頭と目の協応を取り上げ、次のように述べる。

頭と目の協応動作は視野を探るのにごく大切なものなので、特殊な装置に統制されていて、ごく古くからの神経装置に対応しているのである。その中枢は神経学的に割合低い所にある。すなわち進化の道程において原始的な水準のものであって、したがって個体の行動においてむしろ早く出てこななければならないのである。（前掲書）

発達の早期から見られる機能は、神経学的には低次の脳の領域に中枢があるというのが大前提となっている。そのような機能として、睡眠、内部感覚（内臓感覚）、自己受容感覚等が挙げられている。たとえば、睡眠の中枢は「大脳両半球の下に面した所、漏斗状の所（視床下部の一部）」にあるとする。視床下部は睡眠や性行動、そして情動の中枢であることが知られている。

ワロンが本書を執筆した頃、様々な機能の中枢の位置が明らかにされつ

つあった。睡眠の中枢などはその代表的なものであるが、視床下部の一部という漠然としたものである。その他の機能については、まだ中枢が特定されておらず、動物実験などから推測されている程度である。ワロンが詳しく述べているのは、むしろ機能の表れとその発達についてである。たとえば、呼吸から言語への発達について、新生児の呼吸は心的反応とは無関係であり、話し方の前に叫びを発するが、それが様々に調整されて言語のための音声が用意されるという。

初めの痙攣的であった動作は和らげられてこようし、内臓収縮の中枢にさらに発達にともない新しい中枢活動が重なって構音は呼吸筋肉の収縮よりもはるかに繊細巧緻なものとなるだろう。しかし話し言葉の音はもともとやはり呼吸の運動から出ているものなのである。（中略）言語表現が思考に象徴の道具を与えるものでありながら、その素材としては内臓や姿勢の働きを成り立たせているのと同じ姿勢形成的な運動をもっていることがよく示されているのである。（前掲書）

音声言語の起源は呼吸である。呼吸は内臓収縮の中枢に依拠しており、音声言語は高次の中枢の活動であるものの、内臓収縮の中枢の影響を受ける。このようなワロンの見方は一貫しており、情動と表象との間にも同様の関係を想定している。上部構造は下部構造に規定されるという見方であり、ワロンと同時代のイギリスの神経学者ジャクソンの階層理論（ジャクソニズム）に通じる考え方でもある。ジャクソンは脳の階層的進化とその病的崩壊を考えたが、ワロンは個体における脳の階層的発達を考えた。大脳半球下部に中枢があると考えられる自己受容感覚の1つである関節の感覚も、身体の緊張・収縮を支配しているが、やはり次第に複雑な活動に統合されて自律的な現れ方をしなくなるとワロンはいう。しかし、実験によって高次の中枢が除去されたり、高次の中枢との連絡が絶たれたりすると、その感覚が単独で現れてくる。ワロンはこのような初期の機能の発達に

ついて詳しく述べた後、次のような問いを発する。

ではこの時期が人間において、外界との交渉活動にこれほど幾月ものあいだ先行しているのはなぜかということが説明されなくてはならない。（中略）なるほど生物が進化してその適応機制がより複雑になり、経験にうったえた適応方法がより重要になってくるほどに、それだけ一層幼児においては機能も未熟で、機能を使いこなせない状態になっているものではあるがそのような当然のことを言うだけでは本質的な問題が回避されてしまう。明らかにせねばならないことは、かくも長く続く情動活動の時期と、その後の、人類にもっとも特徴的な能力との間にいかなる関係があるかということである。（前掲書）

まず、乳児が生後しばらくの間、自力では外界に適応できない無力な状態であることについては、ポルトマン（1951）が「生理的早産」と名づけたヒトの特徴である。ポルトマンは、ヒトの妊娠期間はその複雑、高等な組織体制からすると1年短いと考えた。そしてヒトにおいては生得的行動様式が限定されており、生後1年目から自由な「世界に開かれた」行動を獲得し始めることをポルトマンは強調し、その具体例として直立歩行、言語、洞察を挙げた。すなわちポルトマンは、短い妊娠期間と長い発達期間が高等哺乳類であるヒトの本質的特徴であるとするのに対し、ワロンはそれを本質的問題ではないとする。

ワロンは低次の中枢と高次の中枢、自動作用と随意運動、情動と表象、これらの対立、拮抗関係をヒトの発達の本質としているかのように読めるが、彼が指摘したのは対立だけではなく、時に協応することもある両者の相互作用である。彼は次のように述べている。

交渉的活動のうちである運動と表象とのいずれとも、情動は対立的なのではあるが、それでもある場合には目的的な反応の効果を増進することが

なくはないであろう。目的的な反応に適う身体的内的全体的な衝動とは、キャノンが示したように、内臓的活動にうちかって自動作用が生じたときには、それに使われるエネルギーを、多量に解き放つものである。緊張の変化は、これもやはり、筋肉組織を敏捷さと強い収縮に都合のよい状態にする。（前掲書）

そしてワロンは情動の役割を次のように規定する。

しかしここに、もう一つ別の形の行為がたちあらわれる。それは他人に影響を与えようとする行為、ないし他人の心を通じて何かをしようとする行為であり、実はこれこそ、従来諸家が情動を物的環境に対する活動の必要にあてはめようとした試みよりも、はるかに完全に情動の説明を可能にするものなのである。（前掲書）

さらにワロンは、情動が運動や自動作用（自律神経に支配された活動）とも異なる独立した中枢を持つ活動であり、自動作用と知的行為の橋渡しをするものであるとする。

情動の様相をあらわす他に用のなさそうな表出は、神経系の中に、その効果を調整したり変化させたりするれっきとした中枢をもっている。それら表出の意味は、高等な動物ほど重要になり、人間では感情がもっとも微妙に表情に現われるようになっているのである。（中略）そのようにして集団的努力や社会生活の成立を助け、これが心的生活の洗練を可能にした。これは一人きりの個体からは生じ得ないものである。そのことによって情動は、純粹の自動作用と知的行為との橋わたしの役をつとめてきたのである。（前掲書）

情動が他者に作用し、人と人を結びつけるものであることはワロンの説

明によるまでもない。問題は、情動が自動作用と知的行為の橋渡しをするものであるという主張である。情動と表象、情動と外界との交渉活動の対立を示す事実は数多く挙げられているが、情動が自動作用と知的行為の橋渡しをするという主張の根拠として述べられているのは次のことくらいである。

そして共同活動がなければ、知識も言語も象徴も不可能であった。さてそこで、儀式化した情動が、象徴作用の到来のために多分何かの役に立ったものとする、また集団的な心性や生活のもっとも決定的な表明を準備したものらしいとすると、それは自動作用と認識との必然的な仲介者でもあったことを認めなければならないのである。（前掲書）

ワロンは人類の歴史において共同作業から言語や象徴が生まれたという説から出発し、その際、情動が何らかの役割を担ったとすればという仮定の上に、情動が自動作用と認識を仲介したという結論に至る。しかし、これはあくまで仮説であって根拠にはならない。情動が社会的役割を持つことについても同様に、情動が人類の歴史において果たしたと考えられる役割とその中枢が皮質下にあることを根拠としているが、これも根拠としては不十分であるといわざるを得ない。

情動が社会的役割を持つことに関しては、乳児期にその証拠となる事実を見出すことができる。たとえば、乳児期の社会的微笑、人見知り、社会的参照等から、情動が他者を動かし、乳児の生存や発達に必要な環境を整えることに大いに寄与していることは明らかである。しかし、『児童における性格の起源』ではそういった事実は挙げられていない。当時、乳児の研究は認知発達についてピアジェが研究を始めたばかりであり、乳児の社会性に関する研究はまだ少なかった。そのことからするとワロンは先駆的であったといえるが、基礎的知見が乏しく、進化の観点から情動の役割を考えることしかできなかったため、仮定に仮定を重ねることになってしま

ったと思われる。

情動のこの伝染性と集団性が、情動自体の進化にとってのみでなく、人間の歴史においても、人間が風習や儀式によって組織的に教化されるために決定的に重要なものであったと考えなければならない。そのような風習や儀式は今も原始的な部族の間に残っている。（中略）集団はかくて、人間の進化のために役割を果たす力を得るのである。（前掲書）

今日でも、情動が集団の形成や維持に影響を及ぼすことは間違いない。そして儀式による教化は原始的部族に限らず、文明社会でも見られる現象である。しかし、集団が喜びや怒りなどの情動を共有し、一斉に同じ動きをすることはあるにしても、組織的な集団行動や儀式による教化となると、情動以外の要因が必要なのではないか。情動が組織的集団行動＝共同作業を可能にし、そこから表象や言語が生じるという見解にも同様のことがいえる。すなわち表象や言語の発生には、情動と集団行動以外の要因が必要であると思われる。ピアジェは『知能の誕生』において、それが感覚運動的活動であることを主張した。『知能の誕生』こそワロンにとって克服しなければならない課題であった。

3. ワロンの二元論的スタンス

『児童における性格の起源』第1部には、結論らしきことは述べられていない。情動の「起源」について詳しく述べられているものの、情動と表象とのつながりに関する見解は仮説に止まっており、ワロンの情動論は発展途上であったと見ることができる。しかしその後、ワロンは情動を離れ、発達論へシフトする。そのきっかけはピアジェの『知能の誕生』であった。しかし、児童精神医学者としてのワロンの本領はやはり情動論にある。今日の神経科学の知見に照らし合わせてみると、ワロンの情動論の限界が見

えてくると同時に先駆的な部分も見えてくる。

情動や自律神経の中枢が視床下部にあることはワロンの時代に明らかとなっていた。そして大脳皮質の発達とともにそれら低次の機能は大脳に支配されるようになることもわかっていた。そこまでわかっていたにもかかわらず、ワロンが表象や言語の発生を大脳の発達に結びつけて論じなかったことは不可解である。『児童における性格の起源』では情動に焦点を当てていたため、表象の発生にまで考察を広げなかったことは理解できる。しかしその後、表象の発生や言語の発達を脳神経系の発達と結びつけて論じなかったのは、ピアジェから批判されたこともあったが、大脳の研究が進んでいなかったことも大きな理由であったと思われる。

情動がこのように進化してくると、それは明らかに下位脳の限界を越えてしまいます。皮質、とくに前頭葉の参加がますます必要になってきます。前頭葉は、解剖学的には皮質下の諸中枢と連絡しており、機能的には、主体の精神的人格に関わり、自分の行動について熟慮し社会的要請を考慮する能力と関わっています。（中略）意識のなかで、器質的印象と知的イメージとは対立しあいながら、同時に連携しあっています。両者のあいだでは、相互の作用と反作用がたえず続けられているのです。さまざまな哲学体系が物質と思惟、実存と知性、肉体と精神とのあいだに設けようとしてきた区別がいかにもむなしいものであるかを、このことは示しています。（*L'organique et le social chez l'homme*. 1953, 「人間における器質的なものと社会的なもの」 浜田・谷村訳, 1983）

このように、ワロンは情動の中枢が視床下部だけでなく前頭葉にもあり、前頭葉と皮質下の中枢がつながっていることを指摘している。このことから、『児童における性格の起源』でワロンが主張した「情動が自動作用と表象を橋渡しする」という仮説が神経学的に裏づけられたことになり、還元主義という批判を恐れる必要はなくなる。表象が脳内で発生し、運動や

情動と結びついていることは疑う余地のない事実である。『行動から思考へ』におけるワロンのスタンスは二元論であったが、ここでは二元論を克服しているように見える。ワロンが時として還元主義、時として二元論の立場を採っているように見えるのは、当時の神経科学が発展途上にあったためであると思われる。特に神経伝達物質の作用と分泌のメカニズムについてよくわかっていなかったため、対象によって説明原理を使い分けざるを得なかった。そのためワロンは、情動について論じる時は還元主義、表象や知的行為について論じる時には二元論、そして自我について論じる時には個人主義を採ることになった。表象や知的行為のメカニズムについては現代の神経科学でもよくわかっていない。二元論の克服という課題は今も達成されていないのである。これは児童心理学においても同様で、現代のフランスの児童心理学者ウーデ（Houdé, 2007）のテキストを見ると、ピアジェとその学派の新しい研究の紹介に加えて、神経科学の研究の発展について述べられているが、その両者の関係を明らかにすることは今後の課題とされ、心理学の研究と神経科学の研究が並置されるに止まっている。これはデカルト以来のフランス心理学の二元論の伝統と呼んでもよいのかもしれない。

「ピアジェ vs. ワロン論争」という図式で見ると、諸家の見る通り、ワロンの勝ちかもしれない。にもかかわらず、ピアジェは注目され、ワロンは忘れられた。理由は明らかで、ピアジェがユニークな実証研究を数多く行ったのに対し、ワロンには注目されるような実証研究がなかった上に、研究においてピアジェのような一貫した観点がなかったためである。ワロンの研究は、L'enfant turbulent を除けば、事例ともいえないエピソードと多分野の知見の寄せ集めで、きちんとした研究の体を成していない。その一方で、神経学、哲学、心理学、人類学等、引用する知見は多分野に渡るため、むしろ心理学以外の分野の研究者から注目されてきた。思想的立場は弁証法的唯物論と思われながら、研究のスタンスは二元論に限りなく近い。しかし、このような自由奔放さは貴重である。児童精神医学の伝統

といえるかどうかはともかく、ワロンから学べることの1つは、分野や方法論にとらわれない視野の広さ、発想の豊かさである。それだけでは支離滅裂になる恐れがあり、実際そうなりかけているが、神経学を基礎とする精神医学の枠組がそれをかろうじて防いでいる。

ワロンには人類学、社会学等のほかにマルキシズムの観点があったとされる。心理学も含め、科学は中立的なものであるという思想＝幻想があるが、特に人間を扱う場合には、何らかの思想的影響を排除することは不可能である。ワロンの場合、神経学によるところは大であったが、発達について論じる際には、神経学だけでなくマルキシズムも含めた様々な観点が見え隠れする。錯綜していてわかりにくいのが、このような視野の広さ、柔軟さは児童精神医学のよき伝統ではないかと思われる。心理学者としては方法論的に失格という評価を下さざるを得ないが、児童精神医学者としてのワロンの研究態度には学ぶべきものがある。それは少子高齢化と貧困化が進む現代の日本に必要なものである。

日本の発達研究の多くは「定型発達」の子どもの対象としている。障害児を対象とする研究もあるが、その場合には診断が下された子どもに限られる。ワロンの学位論文のテーマは「L'enfant turbulent」である。様々な障害であろうが、それがはっきりしていなくてもワロンはそれに取り組んだ。そのような姿勢は「臨床家」として当然のことであるが、「研究者」としては容易なことではない。よくわからない研究対象に対して研究方法は手探りにならざるを得ないし、何よりテーマとして認められないからである。「よくわからない子ども」の研究で一定の評価を得ることは、少なくとも現代の心理学界においては絶望的である。ワロンはそのような研究を行う臨床家兼研究者のモデルとして再評価されてもよいのではなかろうか。

「よくわからない子ども」という表現は極端であるが、障害の診断基準が精緻化され、障害のカテゴリーが細分化された今日の状況は、専門家でさえ「よくわからない」状態に陥る危険性を増大させている。障害の診断

基準は暫定的なものであって度々改訂されるし、エビデンス重視といいながら行動指標しかないとするれば、所詮それは相対的なものに過ぎない。「スペクトラム」という概念がそのことをよく表している。このような混沌にも近い状況に対し、ワロンが採ったスタンスが参考になる。

『行動から思考へ』においてワロンは、ピアジェが成熟と集団を無視していると批判し、成熟と集団、すなわち身体的成熟と社会的環境を精神発達の要因と考えた。しかし、精神発達をそれらの要因に還元しようとはせず、要因を無視することもしなかった。そして両者の相互作用であるという結論にも安易に飛びつかなかった。このストイックな態度こそ科学的といえるかもしれない。

よくわからない子どもが目の前にいる時、現代の専門家は診断基準に照らして障害の判定を行うであろう。診断基準など気にせず、とにかくよかれと思うやり方で子どもにかかわるという方法もあるが、問題の原因が脳をはじめとする身体にあるのか、環境にあるのか、その両方にあるのか、それを探り、その問題に対処するというやり方が一般的である。しかし疾病とは異なり、発達は要因を操作すれば劇的に変わるというものではない。脳に障害があることがわかり、薬物による治療で症状が軽快したとしても、環境を調整し、時間をかけて身体と「心」を育てていくことが必要である。この場合、脳だけの問題であるとする還元主義は得策ではないし、ピアジェのように、発達の要因を度外視して主体性を追求しても、主体性自体要因の影響から逃れられないことは明らかである。身体と環境、そして「心」のそれぞれを重視し、それぞれに必要な処遇を行うことが必要である。これは現代の児童精神医学、児童臨床心理学のオーソドックスなスタンスであろう。そしてこれこそワロンの採ったスタンスであり、二元論的スタンスと呼んでおく。科学的にはともかく、このスタンスは実践的には有効である。ワロンは二元論より、還元主義やピアジェのような個人主義の限界をはるかに重く見ていた。

このようにワロンを理解することは、これまでの日本の諸家の理解とは

大きく異なっており、曲解の誹りを免れないかもしれない。しかし日本の諸家は、ワロンが児童精神医学者であったことを忘れたかのようであり、その一方で、彼の政治的立場にとらわれ過ぎている。児童精神医学者としてのワロンのスタンスこそ、現代的意義を持っていると思われる。

引用文献

- Houdé, O. (2007). La psychologie de l'enfant. Presses universitaires de France.
- 加藤義信 (1996). ワロン『行為から思考へ』におけるピアジェ批判 (加藤義信・日下正一・足立自朗・亀谷和史編訳著 ピアジェ×ワロン論争 ミネルヴァ書房.)
- Piaget, J. (1948). La naissance de l'intelligence chez l'enfant. 2^e ed. Delachaux et Niestlé. 谷村覚・浜田寿美男訳 (1978). 知能の誕生 ミネルヴァ書房.
- Portmann, A. (1951). Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen. Basel. 高木正孝訳 (1961). 人間はどこまで動物か 岩波書店.
- 滝沢武久 (1975). ワロン・ピアジェの発達理論 明治図書.
- Wallon, H. (1932). Les origines du caractère chez l'enfant. Presses universitaires de France. 久保田正人訳 (1965). 児童における性格の起源 明治図書.
- Wallon, H. (1941). L'évolution psychologique de l'enfant. Colin. 竹内良知訳 (1982). 子どもの精神的発達 人文書院.
- Wallon, H. (1942). De l'acte à la pensée. Flammarion. 滝沢武久訳 (1962). 認識過程の心理学 大月書店.
- Wallon, H. (1953). L'organique et le social chez l'homme. Scientia, avril. 浜田寿美男・谷村覚訳 (1983). 人間における器質的なものと社会的なもの (浜田寿美男訳編 ワロン／身体・自我・社会 ミネルヴァ書房.)
- Wallon, H. (1954). Psychologie et matérialism dialectique. 滝沢武久訳 (1960). 心理学の立場 (滝沢武久訳 科学としての心理学 誠信書房.)